



25

弘前市出身・仙台市、東北  
大学大学院理学研究科教授



千葉 柁司

リンゴといえばやはり青森県産だろう、このようなやりとりは今では当たり前のように交わされる。その度にそうだと誇らしく答える。しかし、青森県にリンゴは最初からあったわけではなく、先人が最初の苗を植えて広め、農家が枝の剪定技術を磨いておいしく優れたリンゴを作り続けてきた長い歴史の賜物であると理解している。こちらのスーパーに行くと、宮城県産の地場野菜がたくさん置いてある中で、ニンニクやナガイモなどは自信をもって「青森県産」と明記して置いてある。そうすると、青森県産のものはとてもいいからと定評があるから、消費者は迷わず手にして買い物かごに入れる。当たり前のようなのであるが、このような一定の評価を獲得するまでにどれだけの努力があっただろう。

私の実家は農家であったので、リンゴだけでなくいろいろな野菜や果物も豊富に植えてあった。虫食いのキャベツはそれだけうまいし、取れたてのトマトはとても甘く、ナスやピーマンも最高、夏のジャガイモ掘りも楽しかった。夏は取れたての枝豆やトウモロコシをすぐに茹でて食べ、桃も手をぬらしながら皮をむいて食べた。トウモロコシは葉っぱの形も面白いので学校の図画の宿題にも利用できた。夕食が終わると、母親が形の崩れたリンゴを手籠にいっぱい持ってきて、一つ一つ剥いてよく食べさせてくれた。子供のころは家が農家というのは何だか気恥ずかしい気がして学校でもあまりそう言わなかったのだが、今になってみると何と誇らしく恵まれていたかと実感する。初めて一人暮ら

# メイド・イン・あおもり

しをした時期、スーパーに行って喜んで買ったトマトのあまりの味のなさにびっくりして、その時に子供のころに当たり前だと思っていたものが、急になくなっていかにも大事なものであったかを思い知らされた。野菜や果物の本当の味が体に染み付いていた。

当然と考えていてあぐらをかいているとありがたみがわからなくなる。先人が築き上げた優れたものを生かすも壊すもわれわれ次第である。目先の利益を短絡的に追いかけると必ず大きなしっぺ返しがある。プラスマイナスのゼロではなく確実に大きなマイナスである。それは、最近のさまざまな事件が教えるところであろう。

私がいる大学の研究室にも、ときどき青森県出身の学生が入ってくる。一生懸命に標準語を話しているつもりでも、ちょっぴりなまりが入っていて一瞬にして青森県産だとわかる。それが微笑ましくエールをひそかに送る。



挿絵・佐藤 元昭

矢野龍渓の「土の表面に湿り気がなくなったら、早めに水やりをしてくだ

小鉢の水やりは回数多くして

て、人馬の往来が多く、通運会社もあって、その運賃は、平地・人四銭五厘、馬四銭九厘、人力車八銭、険坦

